

ることがわかった。標本は日本モンキーセンター、京大霊長類研究所のものをを用いた。

正中矢状断面からみたケルコビテクス属の性差
および種間差 — 3次元計測装置・ベクトロン
による断面輪郭線の描出—

安井金也(京大・理)

霊長類頭蓋骨の断面輪郭線の描出は、これまでヒト頭蓋骨用の頭蓋支持器と描画器を用いていたが、本年度(1986)、京大霊長類研究所に3次元計測装置(ベクトロン、VSC-07、小坂研究所)が導入され、本装置を利用することにより特別な技術を要することなく、望む断面輪郭線が得られるようになった。ベクトロン自体はデータの保存や計算処理に大きな制限があるが、RS232Cインターフェースがオプションで用意されており、これにより外部装置との送受信が可能である。以下に端末装置としてNECのPC9801を対象として、ベクトロンとの接続法を述べる。小坂研究所供給のRS232Cケーブルは、本体側と端末側でコネクタが異なり(端末側が標準)、配線は平行である。したがって、配線の変更はもう一本のケーブルを用意して、それを変更してアダプターで接続した方が便利である。配線は、1は1、2と3はクロス、4・5は互いにつなげて他端の8へ、6と20はクロス、7は7にそれぞれつなげる。端末のRS232Cのモードは、ボーレート4800、データビット長8、パリティチェック無し、ストップビット長1に設定し、ターミナルコードはC/R(dH)である(ベクトロンにより変更あり)。実際の接続時のプログラム(N88 BASIC)は次のようになる。

```
DIM GETDS(80)
NACS=CHR$(&H15):ENQS=CHR$(5):
ACKS=CHR$(6)
OPEN "COM1:N81XN" AS #1
FOR J=1 TO 10
FOR I=1 TO 5000:NEXT I
PUTDS=ENQS:GOSUB ①
FOR K=1 TO 100:NEXT K
IF GETDS(1)=ACKS GOTO ②
NEXT J
②PRINT "接続完了"
```

```
①PRINT #1, PUTDS
FOR J=1 TO 80:GETDS(J)INPUT$
(1, #1)
M=M+1:IF GETDS(J)=CHR$(13)
GOTO ③
NEXT J:③IF GETDS(1)=NAKS
THEN GOSUB ④
④PRINT "ERROR OCCUR CODE
Na=" ;
FOR J=2 TO M:PRINT USING "I"
; GETDS(J) ;
NEXT J:PRINT CHR$(13)
```

ヤクザルの食害による二次植生内の採食樹の枯死と樹形変化についての研究

—自らの餌を食いつぶすMonkey-Tree
interactionの一例)—

湯本貴和(京大・理)

屋久島の林道開発によって生じた道沿いの二次植生のなかにはヤクザル(*Macaca fuscata yakui*)の採食樹として重要なものが数多い。そのなかでクスノキ科のアオモジ(*Litsea cubeba* Pers.)は、春は新葉、夏は果実、冬は枝と長い季節にわたって多角的に利用されてきたが、近年ヤクザルのover grazingによって樹形変化をうけ、さらには枯死に至る個体が多く観察されるようになった。特に西部林道沿いの旧工事場群の遊動域内の林道沿い0.5 kmのアオモジは、1985年春には12個体のうち5個体が樹形変化をうけ、残り7個体は枯死していたが、同年冬には1個体が生存しているにすぎなかった。今調査は、ヤクザルの食害が、アオモジに及ぼす影響を、採食の様子を観察するとともに、樹幹解析法を用い、経年的な生長量の変化を追うことにした。

アオモジの枯死寸前の衰弱個体を観察すると、主幹上部から枯れていき下枝に葉が残っていることが多い。他の植物が覆いかぶさり光量不足で枯れていく被陰衰弱個体では、逆に下枝から枯れ上がっていく場合がほとんどである。実際、アオモジの新葉が食害されることを観察すると、主幹を登り、手の届く範囲で枝を曲げ、片端から枝の頂端部の葉を食べていた。下枝には、からだを支えきれず乗れないため、下部に葉が残るが、上部